



左：宇治市 宇治神社 几帳
右：東近江市 外村宇兵衛邸
潜り暖簾

素材と表現技法を見ると、江戸期に棉の栽培が全国に広がり女性の衣服も華やかになるがそれ以前は庶民の使う布は麻がほとんどであり、現在は綿布が多い。今回の取材でも平織綿布が90%を占めた。一品生産のためか長く使っているものは型染め、筒描きが主で最近作られたものは顔料プリントも散見される。デジタルプリントも増える傾向にある。ポリエステル素材は一部であった、やはり天然素材が欲しいのだろうか。

現在見られるデザインについては、やはり商標などの紋が店名を中心に簡単に印すものがほとんどであり、古くから伝わるものの中には風格すら感じられ、緊張感のあるバランスは時代を超えた斬新性を訴えるものも多い。しかし一方で、多様性が言われる現在にあってデザインの方向性や考え方は意外なほど伝統的な範疇に留まっている。ここに私達もの作りをする立場にとってまだまだアプローチする余地が十分に有るのではないかと。

今回の勉強会に先立ち京都、大阪、東京、奈良の各一部であるが取材に歩いた。家庭で使われる暖簾までには至らなかったが出来かぎり店の人に話を聞いてみた。中にはデザイナーや建築家が積極的に計画した所もあるが、多くは染屋さんに頼んで出来てきました、という返事が多かった。その点で、素材の吟味からデザインまでもっと強いアプローチが出来ないものだろうか。勿論色々な制約があるだろうが、何百年ものあいだ変わらない理由が確かに存在し、それも布の力と言えるだろうがまだまだ表現の可能性は有ると思う。

この勉強会では最後に、月に兎を探しに行ったアポロ11号が月面に立てた旗の画像を見ていただきながら終わった。強烈なメッセージを放つ、人が最も遠くに掲げた布である。暖簾は身近な生活の布であり古くからいるんなものを守ってきた、そしてひと目見て瞬時に沢山の事を伝える布としてこれからもずっと存在するだろう。だとすればつつい見逃しがちな糸や布やその他の素材の事も、メッセージ性の事も、もう一度、見直し確かめながらアプローチすることで新たな布の力が生まれるかもしれない。(板東 正)



京都市 お茶屋 長暖簾 高井潔著「暖簾」から
金沢市 花嫁暖簾 高井潔著「暖簾」から
大阪市 麵料理 水引暖簾、長暖簾
京都市 京料理 太鼓暖簾